RUSH GRACE UNDER PRESSURE

1984

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1984 ROCKUPATION '84 第21弾

ラッシュ

日本公演

11月16日 名古屋 瀬戸市文化センター
主催●中部日本放送

11月18日 福岡 福岡サンパレスホール
主催●RKB毎日放送/フラッグ・スタッフ

11月20日 大阪 大阪府立体育館
主催●FM大阪/ウドー音楽事務所

11月21日 東京 武道館大ホール
主催●文化放送/ウドー音楽事務所

招聘●ウドー音楽事務所　協力●EPIC ソニー

訳・ジンジャー渋谷　印刷・L.D.企画

PRESSURE RELEASE

BY NEIL PEART

GRACE NOTE...ちょっと考えさせてくれるかな。あれは『シグナルズ』のアルバム・リリースから間もなくだったと思う。我々は、バンドの将来について考えはじめ、話し合ったんだ。ツアーの初め、我々の古くからの友人で共同のプロデューサーでもあるテリー・ブラウンが、マイアミに飛んで来てくれた。ショーのあと、この件について話し合うために、酒を飲み、リラックスした我々を乗せたバスは、暗くてムシムシするフロリダの一夜を走り抜けた。

アレックス、ゲディと私は、かなり長い間このようなことを話し合ってはいたのだが、我々自身で決断を下す時期とみて、他の人と仕事をしてみる事にしたのだった。我々は違う環境から違ったアプローチやテクニックを、ラッシュの音楽やサウンドに提供してくれる人がほしかった、いや、必要だったのだ。

UNDER LINE...この決断が、テリーに対して不満足であるとか、信頼に欠けるとかいう問題ではないことを説明するのが重要（そして難しいこと）だった。ただ、10年も一緒に11枚ものアルバムを出して来た、この心地良く能率的なレコーディング・チームも進化し、我々4人はお互いの意見や違ったアイデアに対してどう思っているのかがすっかりわかるようになっていた。確かにこの状態は良いと思えるのだが、実はこれが心配でもあったのだ。

PRESSURE POINT...しかし、こんな長い時間がたってから他の人と仕事がしたいなんて言いにくいし――聞かされる方はもっとイヤだろう。我々にとってすごく難しいことだったが、テリーにしてみればもっとのはずだ。彼とはこれまで一緒にいろいろなことをやって来たし、ましてや彼は我々の発展と精練に大きく貢献してきたのだから――ミュージシャンとして、また人間としてとてもぎこちなく、難しく、そして少し苦しいものだったが、"もしあの時やっていたら"と後で悩むよりは、今やった方がいい。客観的には正しい事と思っても、主観的には簡単に理屈をつけて逃げ出す方が楽なものだ。我々は固く結ばれた"ヘソの緒"を切らなければならなかった。

GRACE NOTE...当初"有能なプロデューサー探し"はなかなか楽しかった。好みのアルバムのクレジットを見てリストを作り、誰が、誰に、何をしたかを調べた。我々が気に入ったアイデアや構成は、アーティストによるものか、それともプロデューサーによるものなのか。プロデュース・センスのいい人より、クリエイティヴな音楽センスを持った人の方が良いのではないか、など、こういったネタ集め、検討会議はおもしろいものだった。

UNDER LINE...だが、もっと真剣にならざるを得なくなり、我々はいろいろな人に連絡をとった。誰の手があいているか？誰が興味を示してくれるか？83年春のヨーロピアン・ツアーの間、我々はイギリスのプロデューサーやエンジニアの何人かと会った。"この人はいいやり方をするなぁ。でも、あの人はすごく物事を良く知ってるし。"我々は彼等と何度も何度もサウンドについて、音楽について、誰と仕事をしたかについて、また、方法、テクニック、スタジオやエフェクトについて話し合った。その話し合いから何も得る事がなければ、その時には、自分達で決定することになるのだ。そして、我々は相談し、とある"氏"を選び出したのだ。

PRESSURE POINT...そして、すべてがうまくいくかに思えた。このすぐれた"氏"と再び会い、お互いのアイデア、批評、個人的なクセや好みまで話し合い、意思は疎通したと思われた。

だが、それから2週間して新しいマテリアルにとりかかろうとした時、連絡があった。"氏"はこの仕事に適していないと言い出したのだ――するどい。

GRACE NOTE...当然、我々ははじめ少しショックを受けた――ヨットの航海に風が吹かないようで――が、それはすぐさましごく前向きな姿勢にとってかわった。もう一度リストを制作し、連絡をとりつけ、誰の手があいていて、誰が興味を示すか？時間はあまりなかったが、我々は必ずや適任者を見つけることが出来ると確信していた。周りの人達も、も早自分達でやってしまうように勧めたし、そうしようと思えば出来たのだけれど、我々は新しい人と仕事をするという当初決定した方針を貫くつもりだった。

失業中の友人達までが協力してくれだした。

UNDER LINE...重大なことは、まったくの独力でやるしかないこと、決心するのも、軌道に乗せるのも、自分達の責任であることだった。もちろん整理係や連絡係がバックにいたけれど、あとは自分達でやらなければならなかった。おかげで我々はより結束力を増し、すばらしいレコードを作るという力強い決意を固めたものだ。

こうなったらうまくやる事が一番の雪辱だ。

それで我々は、音楽面、技術面にすぐれた才能を持つイギリスのあるプロデューサー氏に連絡をつけた。リハーサル場で会った彼は、果たしてアレンジメントやアイデア面において、すごいものを持っていた。一緒に仕事をすることにかなり興味をもってくれたみたいだったし、多少の問題をかたずけたら、このプロジェクトに乗り出せるという。

すばらしい！

PRESSURE POINT...それが――あまりすばらしくなかった。この"多少の問題"が乗り越えられなくなって、一緒に出来なくなったのだ。もう、大声で叫びたくなったよ!!

自信も少しなくしたし。"我々は何なんだ、いったい。レバーのコマ切れかい？"

また、例のリストに戻り、誰が手スキで誰が興味を示してくれるか？の繰り返し。スタジオを予約してある日がさし迫って来る度に、週毎に伸ばしていたのに、またしても運悪く、今になって我々が仕事を一緒にしたいと思ってた"氏"は、他の事で手がいっぱいときた。ガ～～ン！

GRACE NOTE...だが、すべてが真っ暗ではなかった。8月中旬から新しいマテリアルに取り組み出した我々は、そこに決意と苦悩をつぎ込んだ。最初の夜は、ただドタバタで「ビトウィン・ザ・ホイールズ」となる3パートをくっつけたが、2～3日で「キッド・クラブス」と「アフターイメージ」を書き、ようやく自信がついてきた。そして3週間が過ぎた頃には、その3曲と「レッド・セクター・A」と「ボディ・エレクトリック」を加えたラフのデモテープが出来たのだ。それだけでも喜ばしかった！

UNDER LINE...スタジオの予約〆切日だけが頭の中にあったワケじゃない。その時までにすべてがうまくいっていることを予想して、9月の中旬にニューヨークのラジオ・シティ・ミュージック・ホールでのいくつかのショーを引き受けていたのだ。夏の初め以来演奏していないということは、リハーサルのための1週間を必要とするワケだ。

新曲を作ってから2～3の小さなショーもしくは大規模なショーを行ない、スタジオにはいるのが我々の普通のやり方だったが、今回のように世界的名声を誇るステージに、冬眠から醒めてからすぐに立つというのは、あまりにも危険だと思われた（そんな勇気はなかったよ！）。スタジオにはいる準備も出来ていなかったので、我々はニューヨークから戻ってリハーサル場へ行き、ふさわしい人が現れるまで新しいマテリアルにとり組んでいたのだ。

PRESSURE POINT...まだ"ハント"は続いていた。電話、電報、テレックスが世界中を飛び交い、我々の気に入ったものを備えた人には、不可能と思われても連絡した。我々に会うために多くの人々が連れて来られ、Mr.α、β、γ、ε等がどんどん来て、以前と同様、我々は何をプロデューサーから得たいか、我々の音楽は何を求めているか、彼等は何をしてきたか、何が出来るのか、何が大切か、そうでないか――その他、その他を繰り返し話し合った。

"我々がプロデューサーに求めているものはたった2つ、アイデアと熱心さだ。"

GRACE NOTE…我々は“ロジャー・ニーベンド”というマスコット・プロデューサーをもらい――30cmぐらいのアクション人形で（もとはゲディの息子のジュリアンのものだった）、足ヒレとウェット・スーツをつけ、アレックスのテープ・マシーンの上の目立つ所に置かれていた――彼はレコーディングの監督をするようになっていた！（ゲッ）

それから、我々がプロデューサーに求めているものが4つに変わった。アイデアと熱心さと足ヒレ、そしてツバをかけられるために必要なウェット・スーツ！

そう、何だかワケがわからなくなってきたんだ！

UNDER LINE…プロデューサー候補の人達にはすごく難しいことをさせていた。この頃には「彼方なる叡智が教えるもの」と「内なる敵へ」のレコーディングを終え、「赤色の映像」にとりかかっていた。我々の方法とは、“候補者”の一人一人とうちとけてくるまで話し、あるところでデモの曲を全部聴かせる。それから彼等に知的な批評や提案を求めるのだ。そうして2日目に、彼等が何らかのアイデアを抱いた曲を選び、一緒にとりかかる。疑う余地もなく彼等は窮地に立たされていた――が、それは我々も同様だった。

PRESSURE POINT…あの時点でピーター・ヘンダーソンのことは何もわからなかったが、それだけに彼に寄せる期待は大きかった。ある晴れた日の午後に彼はイギリスから着き、我々はお互いに少し緊張した面持ちで挨拶を交わした。機材に埋もれたリハーサル・ルームの床の真ん中に座り、道ばたで顔を合わせた犬のようにお互いのことをくんくん嗅ぎ合った。よくあることだが、友情や互いの尊敬が生まれるのは他の人の音楽についての話からだ。個人的な好き嫌いについての意見を交わし合うことは大切だった。ピーターについて最も印象深かったことは、我々と同じように大の音楽ファンであることだった。好きなグループや曲について話す時も、ホラあのアルバムのB面の2曲目とかA面の3曲目とか、タイトルや曲順を良く知っている。ファンとはそうしたものだ。それに、職業上話をしているのではなく、お互いが興味をもって話しが出来る。これは気に入った。

GRACE NOTE…夕食後、彼に曲を聴かせ、その欠点について、また、どんな風にしたいのか、見解や改良可能な点、あらゆるアイデアについて意見を求めた。

何と、彼は我々が期待していた様なことを感じてくれ、それを知的で自信に満ちた言葉で表わしたのだ。その夜、彼が部屋を出た時、我々3人はお互いの顔を見合わせて――ニヤリとしてうなずいた。ヤッタ！

でも、以前のことがあるので、手ばなしで喜ぶことは出来なかった。彼はこの仕事に適しているだろうか？ 解決せねばならない“多少の問題”を抱えてはいないだろうか？どこかへ消えてしまってそれっきりになってしまわないだろうか？たぶん……。

我々は翌日の朝一番に、彼がこのプロジェクトに責任を持って取り組んでくれるかを聞いてみることにした。朝食後、我々は彼に“君が一番ふさわしい男”だと告げ、本当にヤル気があるのかどうか尋ねてみた。

“そうだねェ”とヤツはクールなイングリッシュ・スマイルをみせて言ったよ。“ヤル気がなきゃこんな所まで来てないさ。そうだろ？”

“ヤッタ！”“スゴイ！”“ヤロウぜ！”思わずみんなで声を合わせた。

そして誰かが言った。“ところで――ウェット・スーツは持ってるかい？”

UNDER LINE…我々はようやくにして Le Studio へはいり、レコーディングに取りかかった。はっきり言って信じられなかった！デモを作り、再びアレンジをし直し、再びデモ作りという作業を何度も繰り返し――我々はこんなことは簡単だと思ってたけれど。（ハ！）もちろん、仕事上うまくいくようにお互いをもっと知らなくてはならなかった――そして互いにおもしろくなってきたようだった。『グレイス・アンダー・プレッシャー』のタイトルが提案されたのはこの頃だった。これは収められる曲のほとんどに関連しているだけでなく、このアルバムがどうやって作られたかということをも意味している。それに我々が今までこの特性を表わさなかったことが、より適している点だったといえる！アタリだ。

PRESSURE POINT…先にも言ったように、長いこと同じプロデューサーとやって来たので、これからはできるだけ違ったものを作らなければならなかった（我々はそう決心したのだ）。僕自身にとっても、新しいアプローチに挑戦する良い機会でもあった。過去に良い結果をもたらしたにせよ、同じことを再びやるだけでは、あまりにも安易すぎるしね。

だから僕はスタジオ内で違ったものを見つけ出し、ピーターはコントロール・ルーム内で違ったものをいじくり回した。我々は2人とも他人に対し少々用心深いところがあるようだ。提案や意見を交わした上で、もっと変わったことに挑み、ようやく良いベーシック・サウンドを作り上げることが出来るのだ。レコーディングはベースへと移り、ギター・サウンドへと進行し、やがて「彼方なる叡智が教えるもの」に取りかかっている。

GRACE NOTE…1983年は疑いもなく多くの人々にとって困難な年だった。でも、気候は良くなかったかい？ 反論はあるかも知れないけれど、僕はこれほど素晴らしい夏、それにあれほどステキな冬はかつてなかったような気がする。我々が曲作りにはいった8月と9月とその前の休暇はとても暑くてあまりにも良い天気が続き、まるで熱帯のようだったし（トロピカルな気分だと仕事に熱中しにくいのだ！）、11月から3月までスタジオにこもっている間は、厳しい寒さで何トンもの雪が降ったし。一冬に5～6フィートは積もったにちがいないよ。クロスカントリー・スキーヤーの僕にとっては天国だったけれど。

クルーは、その冬初めての猛ふぶきの時にランニング・シューズと薄手のジャケットといういでたちでスタジオに着いたが、翌朝早く、全員モーリン・ハイツにある“ミッキーズ”という店に行き、ドデカイ緑のハンティング・ブーツと素敵なスキー・ジャケットを身につけて戻って来た。

我々のクルーもまた“graceful under pressure”なのだ。

UNDER LINE…そう、それは危機と悲劇の年だった。世界的な事柄に関しても、身近な事柄に関しても。我々が曲創りに専念していた時、毎朝ドアの前に配達される“トロント・グローブ＆メイル”紙を、きまって詩にとりかかる前の朝食時に読んでいた。その日のトピックス、特に社説や読者からの手紙の内容は、栄養となり、この状況は何曲かの歌詩に強い影響を与えたものだ。当時は大韓航空747便撃墜事件や話題の巡航ミサイル論争、酸性の雨（僕が気にくわない事の1つ）についてがカナダでも大ニュースとしてとりざたされ、戦争が各地で猛威をふるってもいた。そして僕、我々の家族や友達は、経済、死、病気、ストレス、恋愛問題、失業や不況といった暗い状況を何とかうまく対処しようとしていた（もちろん全部を一度にという訳ではないけれど！）。「彼方なる叡智が教えるもの」、「赤色の映像」や「ビトウィン・ザ・ホイールズ」といった曲には、これらの考えや感情が組み込まれているのだ。ニュース・キャスターらしくピーター・トルーマンはこう語っている。“これはニュースではなく、現実そのものなのです”と。

PRESSURE POINT…ミュージシャンに限ってという訳ではないけれど、医学専門用語で“The Black Ass”と呼ばれる、ある種の心理状態がある。これに陥ると、自分で人生をコントロール出来なくなり、人間性と宿命が重なって大きな障害を招くかも知れず、あるいは異常に疲れるだけかも知れないという。誰しも暗雲に巻き込まれる事はあるのだ。

あなたが、これは絶対良い曲になりそうだと思って一生懸命にとり組んでも、うまくいかなかったとしよう。あなたは腕をうずうずさせ、重苦しい気持ちでスタジオに座り込むことになる。また、曲が要求する演奏がどんなに時間をかけても出来ないとしよう。再生したものを聴いても誰も何も言わず沈黙が漂い、皆が目と目を合わさないようにする。（誰かおもしろいジョーク知ってる？）

こんな時、ある緊張感が不意におそいかかってくる。部屋は静寂に包まれ、誰もが何かうまくいっていないとわかっているのだが、“よくないみたい”などと誰もが口に出して言いたくないのだ。批評するためには代案を出し、自身のプライドを危険にさらすことになり、拒絶や反対意見に対する弱味をも露呈することになるのだ。たとえ同意出来ないことでも、誰かのアイデアに目を向けることは、自分の客観性と自制に挑戦することだ。“何かが間違っている”という前に、“正しいんだ”と言うことは実に難しいものだ。

慎重さを極めないと……本当に。

GRACE NOTE…まあ、それでも楽しい事もあったな。時として“いかがわしい”ホテルは、その日の終り（その夜と言うべきだが）の何よりの休息地となったものだ。雪が深まる前にバレーボールをしたり、雪が積もった芝生でレンタカーを走らせようとしたり（もちろんこれはアレックスのアイデアだ）、２～３フィート積もった新雪にベランダから飛び込んでスノードライヴィングの練習をしたりもした。スキップとラリーは、小さなゲスト用コテージ（大ドライブウェイの小さな家）をクリスマス・ライトや花輪で飾り立てた。ピーター、アレックス、ゲディ、ラリーはテニスをするために、僕はスキーのために朝早く起き、スキップは例のホテルから家に帰るために、ジャックはころがるためにそうした。

そしてもちろん、時折外部からの訪問客もあったよ。家族や友人達との短いひとときは、常に同じ顔をつき合わせている状況からの良い気分転換だったし、スタジオの素晴らしい人達、アンドレのおいしい料理、そしてファンタスティックなムービー・ライブラリー（その時は“The Man With Two Brains”が大ヒットしてたっけ）が気晴らしとなり、快適にしてくれたものだ（あの状況を十分考えた上でね）。

オタワでの一日は楽しかった。我々は有名なポートレート・カメラマンのYousuf Karshに写真を撮ってもらったのだけれど、王、女王、大統領、法王、宇宙飛行士、作家、科学者、映画スター等を撮ってきた写真家のレンズの前に座るなんて、刺激的でワクワクしてしまった。彼みたいな人が我々のような怠け者のアルバム・ジャケット・カバーを撮ってくれるなんて！75歳でありながら、そのあふれ出るエネルギー、創造性、すみやかにムードを変化させる手腕を眺めるのは、本当に素晴らしい事だった。そして、部屋のライトが１つ１つ調節出来ないと言われた彼は、実に印象に残る、実に適切な返事をしたのだ。“それは認めないよ。それは絶対に認められる事ではないのだよ！”

僕もそんな事言えたらなぁ！（よし、これからそう言おうっと！）

UNDER LINE…キーボード、ギター、パーカッション、ヴォーカルのオーバーダビングに２～３ヵ月をかけて、この頃にはベーシック・トラックを完成させ、ミキシングの段階にはいっていた。多くの時間を要したが、物事ははかどっていた。

この時期、私はトロントにいる我々のアート・ディレクターのヒュー・サイムと一日一回（又は２～３回）連絡を取り合っていた。彼はカバー・ペインティングのせいで“ヘルニア”（彼がそう言ったのだ）になりそうだと言い、私は見てもいないのに電話で出来る限り手伝おうとした。(難しい！でもワカルよね！）細かく細かくアートワークを施し、クレジットを苦労して編集し、歌詩を清書してタイプし、写真と書体を選んでレコード・ジャケットとレーベルはデザインされた。そして、スタジオの窓に掛けられた絵が、外の雪に反射した太陽の光で美しく照らされたその日、ようやくヒューは眠ることが出来たのだった。

PRESSURE POINT…しかし、我々はまだ眠れない。この時点で我々のレコードは明らかに遅れており、レコード会社と、過ぎゆく年が両方で我々にそのことを気付かせようとしていた。(気付かなくてもいいのに！）プレッシャーが迫ってきた。1日14時間労働があたりまえになり、夕食もスタジオのラウンジであわてて食べる毎日だった。ミキシングも他のことと同じように、骨が折れるのだろうか？（このあたりで休憩があると思う？）

確かに、ここ数週間というもの、仕事に時間がかかり過ぎていた。スタジオの外の生活はますます考えられなくなり、不気味な修道院に閉じ込もって世を忍ぶ日々であった。家族や友人などの日常的な事柄からはどんどん離れてしまう。手紙が山と積まれ、怠けていた仕事が表面化しても、すべてはこの恐るべき強迫観念に支配されている。なんとかしてここから抜け出すのだ！

ここで我々は、新たなミーティングを開き、ビデオ関係の人達と会った。我々はできるだけ早く物事を片付けてしまおうとしていた。何人かのディレクターを使って、違うスタイルで何曲かのビデオを作りたい。しかし、どの曲、そしてどのディレクターを使うんだ？どの曲も良いビデオができそうなのだが、我々にはそんなに時間が無かった。――実際、時間なんてほとんど無いんだから。

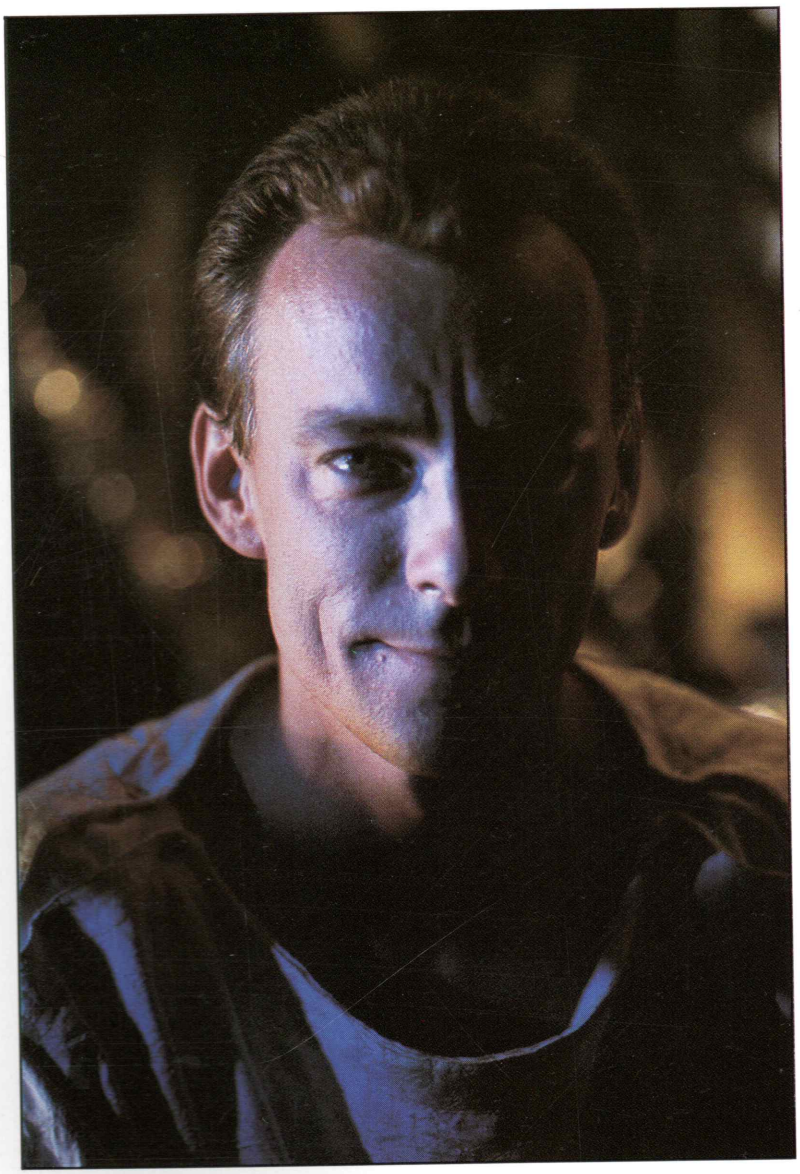
SAVING GRACE…そして、遂に出来たんだ。ファンと評論家はこれから判断を下すだろうが、我々は満足していた。我々のアルバムはある周期をもって発表され、そのうちのいくつかは冒険的で実験的であり、他は結合力があり、決定的なものだ。今回の作品は『ムーヴィング・ピクチャーズ』、『神々の戦い』、『西歴2112年』と同様、明らかに後者のタイプに属したものだ。 漠然とした音楽、コンセプトの脈絡が自然な形で表面化し、異なった種々の影響やアプローチを結合させて、全体的な完全性を引き出している。

もちろん、この満足のいく段階に到達できたのは、すべての実験と冒険にそれだけの価値があったからだ。我々のファンの多くがこの事を理解し、正しく評価し、支持してくれている事は喜ばしい限りだ。バンドが結成以来10年を迎える時が近づくにつれ、若々しい考えでいることが重要であり、視野の狭さや心の狭さ、また変化を恐れるものに対し抵抗しなくてはならないのだ。

我々はうまく適応できると思いたい。我々は出来る限り、“プレッシャーのもとにあっても優雅に（グレイス・アンダー・プレッシャー）”やっていこうと決めているのだ。

せめて大声で叫ばない程度にはね。

Management by Ray Danniels, SRO Productions, Toronto
Road Manager and Lighting Director: Howard Ungerleider
Crew Chief, Stage Manager, and President: Liam Birt
Concert Sound Engineer: Jon Erickson
Production Manager: Nick Kotos
Stage Right Technician: Jim Johnson
Centre Stage Technician: Larry Allen
Stage Left Technician: Skip Gildersleeve
Guitar and Synthesizer Technician: Tony Geranios
Stage Monitor Mixer: Steve Byron
Concert Projectionist: Lee Tenner
Personal Assistant: Kevin Flewitt
Concert Sound by See Factor Inc.: Jim Staniforth, Jason MacRie, Bill Fertig
Concert Lighting by See Factor Inc.: J.T. McDonald, Jack Funk, Ray Neindorf, Ed Hyatt
Concert Rigging by Southfire Rigging: Billy Collins, Tim Wendt
Laser Images: Glen Tonsor, Craig Speaderman
Busheads and Truckfaces: Tom Whittaker, Pat Lynes, Bill Barlow, Arthur MacLear, Red McBrine, Steve Conley
Program Design by Hugh Syme
Photography by Dimo Safari, Fin Costello, and Yousuf Karsh
Booking Agencies: American Talent International NYC, The Agency Group, London, and The Agency, Toronto
Our gratitude for patience and understanding to those who share much of the pressure, and little of the grace: our families.



NEIL PEART

皆さん、御機嫌よう。僕はドラム・セットの真ん中の、一点のシミみたいな存在だ。どこからやって来るのか分からないが、振り向くたびに、ドラムはその数を増している。奴らがひとたび、暗く、暖かいケースの中に詰め込まれると、もしかして…？（無気味な音楽が流れる）

「あなたはイマジネイションの世界へと入って行く…」

あなたは、ドラムの世界へと入って行く――それだ！僕は今年、文字通りドラムを取っかえ引っかえしている。振り向くといつも、奴らが迫って来る。どんどん増えて、どんどん大きくなる。そして奴らときたら、真っ赤なんだ!!赤、まるで血のようなね！“恐ろしい奴だと思わないかい？” O-O-W-H-O-O-O-o-o-o。

OK！うん。メイン・キットは以前と同じ、最近、タマ・アートスターと呼ばれている物の原型だ。24インチのバス・ドラム２個、６インチ、８インチ、10インチ、12インチのコンサート・タム、12インチ、13インチ、15インチ、18インチのクローズド・タム、そして22インチのゴング・バス・ドラムが基本的パターンである。“オールド・フェイスフル”5×14インチのスリンガーランド・スネアは今だにNo.1だと思うし、メタル・ティンバル、厳密に言うと、タマの13インチをまた使っている。

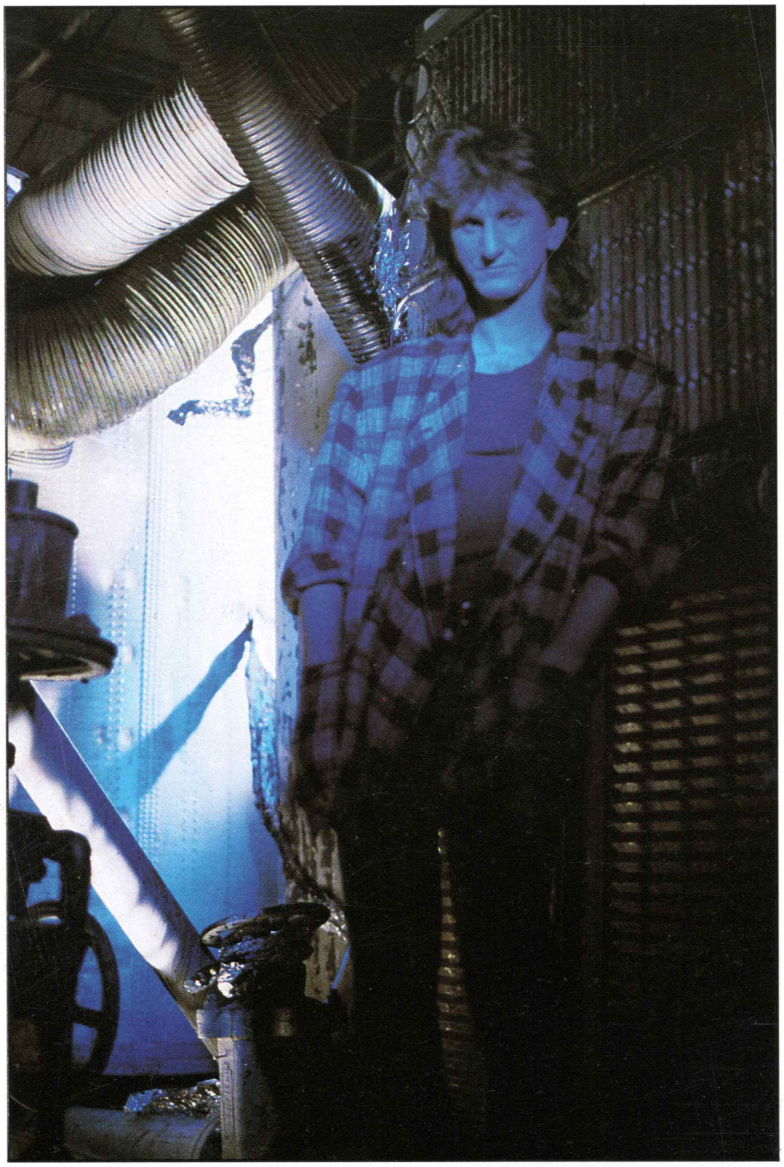
シンバルは、勿論アベディス・ジルジャンで、8インチと10インチのスプラッシュ、13インチのハイ・ハット、16インチのクラッシュ２つ、18インチと20インチのクラッシュ１つずつ、22インチのライド（もう10年も使っている！）、18インチのパン、そして20インチのチャイナ・タイプ。アメリカ、スイス、イタリア、トルコなどで作られた物に対して、実際に中国で作られたチャイナ・タイプというのもある。リア・キットにはもっと多くのジルジャンがあり、22インチのライド、16インチと18インチのクラッシュ、13インチのハイ・ハット、そして先程の中国製のやつ。

リア・セットはタマの18インチ・バス・ドラム、もうひとつのスリンガーランド・スネア、シモンズのタム・モジュールを3つにスネア・モジュール１つ。それと、前後両方にフット・スイッチが付いた、シモンズの“クラップ・トラップ”で構成されている。

それに付随するパーカッションは、只今改善中というところで、おそらく、オーケストラ・ベル、ウインド・チャイム、クロテール、テンプル・ブロック、カウベル、ベル・ツリーなどが使われるだろうが、今のところは定かではない。

スネアとバス・ドラムのヘッドには、今でも、レモのクリア・ドットを使っており、クローズド・タムにはエヴァンス・ヘヴィ・デューティ・ロック（トップ）と、エヴァンス・タムタム（ボトム）、コンサート・タムには、レモのブラック・ドット、ティンバルとゴング・バス・ドラムには普通のクリアー・レモを使用している。細かい物を除いて、ハード・ウェアーのほとんどがタマの製品で、“カムコ”チェーン・ドライヴ・ペダルもそうだし、僕は未だに、プロマーク747のスティックを噛み砕いている。それは、ラリーのせいで、肩の部分のニスがはげかかっている。彼こそが、後ろに潜んでいる実体の無い奴で、ドラム、モニター、ヘッドフォン、機材、それから、シモンズやクラップ・トラップのプリーセットの上で髪を振り乱し、歯ぎしりをしているのだ！

AH-HA-HA-HA-ha-ha!!（O-o-o-o…恐ろしい！）



GEDDY LEE

世界中のスポーツ・ファンの皆さん、コンニチワ。ゲディ・リーです。1984年“グレイス・アンダー・プレッシャー・ツアー”機材リスト、実況放送の時間です!!(拍手)

トータル・ベース――スタインバーガーL2（1983―84年度ベスト・ルーキー）、リッケンバッカー4001、フェンダー・ジャズ・ベース

シンセサイザー――PPGウェイブ2.2（1983―84年度ＭＶＰ）、ローランドJP―8、TR808、オーバーハイムOBX―A、DSXデジタル・シークエンサー、ムーグ・トーラス・ペダル、ミニムーグ

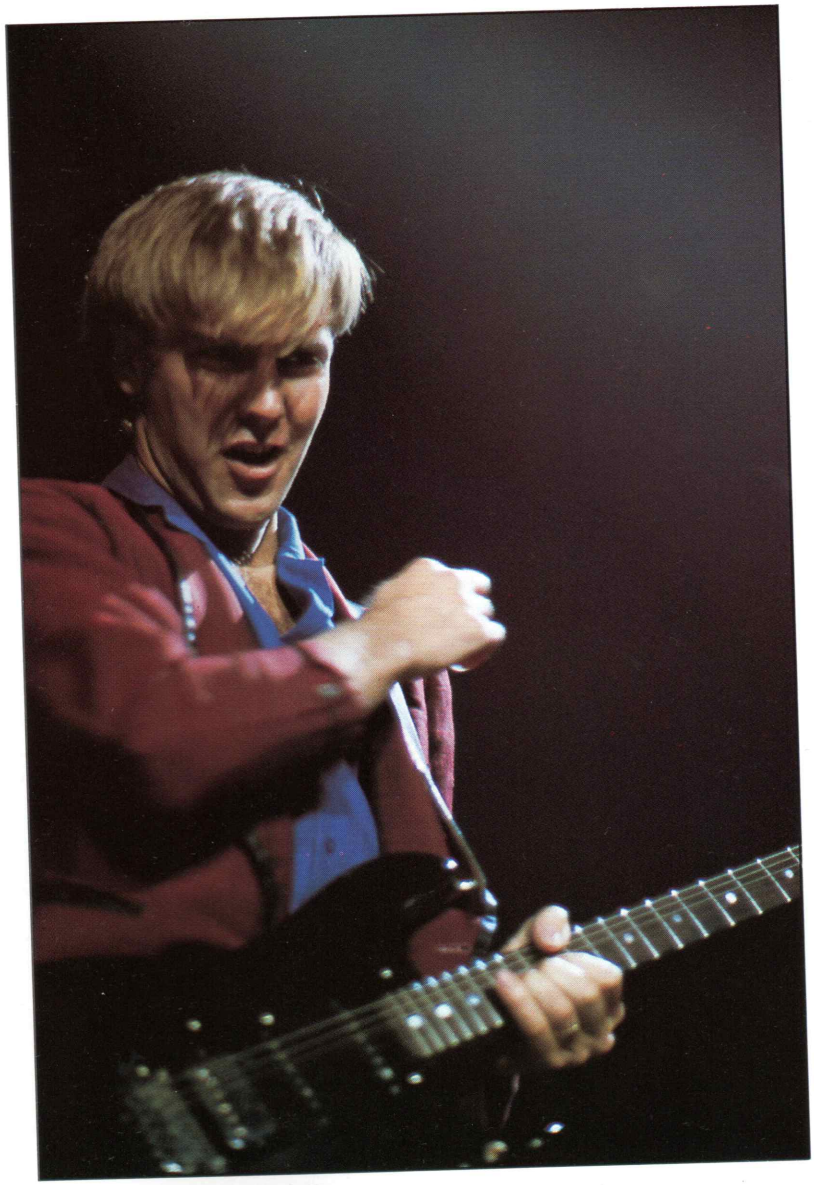
アンプ――BGW750Cパワー・アンプ、フルマン・サウンドPQ―3'S、API550Aイコライザー、スペシャル・ブラザー・ラッセルのミステリー・スピーカー・キャビネット（アリゾナのどこかで修道僧が作ったもの）、これには15インチのスピーカーが２つずつ付いている。

そして“BZZZ…”というノイズ付きのネイディ・ワイアレス・ユニット.

これで全部だね!

それではプレイボール!

P.S.他のページに書かれていましたが、私はヘンター・バーバリアン・ベースは使っておりません。あまりにも長すぎるから。



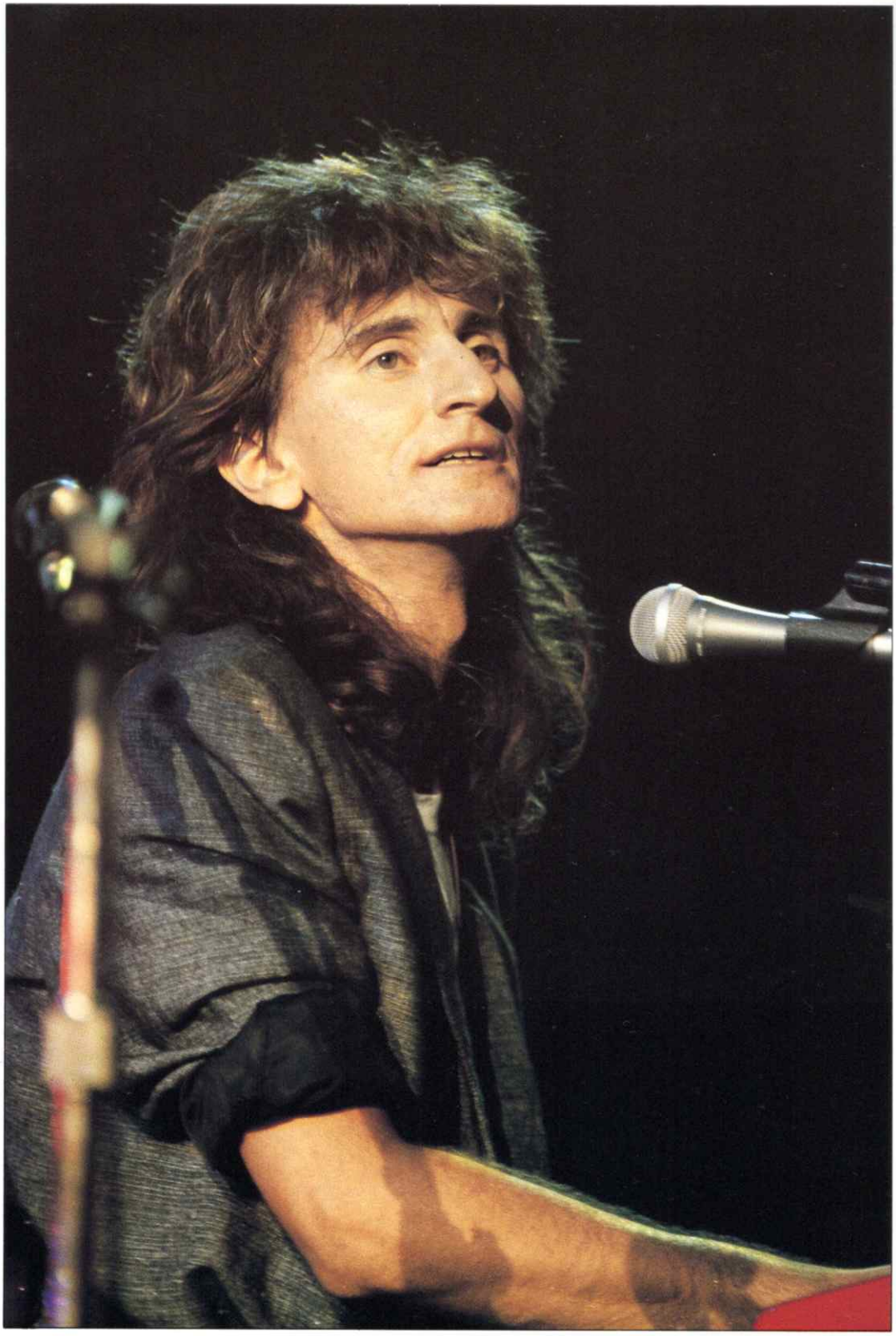
ALEX LIFESON

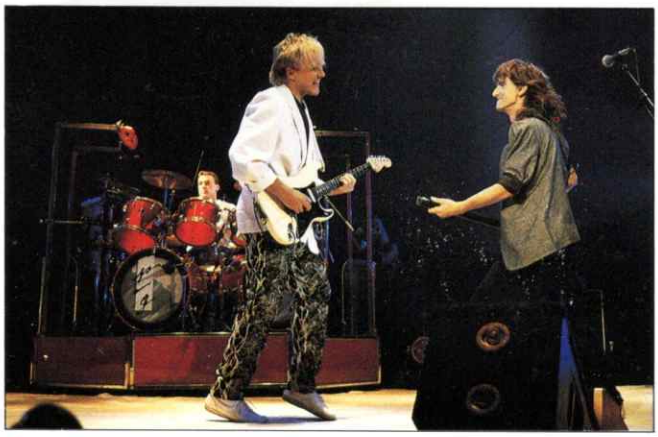
またツアー？そして、また機材リスト。ええと、僕は新しいすごいギターを手に入れた。聞いたことがあると思うけど、それはヘンターだ。とても個性的な、デバディップ・ヘンターにちなんでつけられた名前なのさ。彼は数年前に生まれ、あっという間に大きく成長した。彼は、体毛の代わりに緑色の毛が上半身を覆っていて、まるでセーターみたいなんだ。彼は素晴しい男で、一日中イスに座って、すごいことをやろうといくつも考えをめぐらすのだが、実際に行動したことはない。

彼は3フィート積もった雪の上を、安物のスノー・ブーツと夏物の服でジョギングしていた時に起こったあの不運な事故までは霊感を持っていたんだ。彼は2つのモデルを作り、ラッキーなことに僕はその両方とも持っている。ひとつは“スポーツ・キャスター”というやつだが、もうひとつに関しては秘密だね。(ゲディのページを見て、彼がヘンター・バーバリアン・ベースについて話しているかどうか調べてくれよ！)

とにかく、この2つのギターは、僕がこれまで47回のツアーで使ってたやつにそっくりだ。あまりにも似ているので、違うギターだと思う奴は本当のバカだね。新しいジミー・ジョンソンのギターも手に入れたが、彼のギターなんてここ8年間、見たこともなかったよ。

他には、何も変わってない。それから…アンプも使うよ！黒いコードなんか付いてない魔法のギターもあるし。弦について話そうか！どのギターにも、最低6本は弦を使ってるよ。ボックスは、ノブやライト、それから英語以外の5ヶ国語の説明書付の高価なやつさ。ピアノみたいなものも持ってるんだけど、スイッチの入れ方がわからないんだ。たぶん、特別なジャックがあるんだろうけど。最後に…僕が使っている機材はすべて、メイド・イン・工場です！





FRANCE